

平成17年第9回公開文化学術講演会 講演要録

「ほほえみのカンブチア」

辻 香 織

北 田 薫

【司会】 ただいまより第9回公開文化学術講演会を始めます。この文化学術講演会は、学生の皆様が出したお金で行っていますので、ぜひ楽しんで下さい。

この会は、星稜女子短大の経営学会というところが主催して行っております。経営学会の会長は学長でもありますので、まず最初に学会長で学長の千原先生からお話を伺います。お願いします。

【千原学長】 おはようございます。

きょうの講演会は第9回目の文化学術講演会ということになっております。本学だけではなく一般の方もお見えになっておられます。逆に言いましたら、本学が地域に向けてある意味で学校を開放してするというような意味合いも込められているわけでございます。

学生諸君にとりましては、星稜女子短期大学というのが一体どういう大学なのか、あるいはそこにいる学生というのはどういう学生なのかということを見てもらうチャンスでもあろうかと思います。余りそういう意味では意識しないで、ふだんのありのままの姿を出して、一般の方々に星稜短大あるいは星稜短大の学生というものを見ていただければいいのではないかなと思っております。

また逆に、一般の方々にしましても星稜短大というのはこんな学校なんだ、当初思っていたよりもちょっと違うぞというようなところももしございまして、幾らでもまたほかの方に星稜短大はこんなところだ、あんなところだというようなコメントというものをよきにつけあしきにつけ発信してもらえれば本学のある意味での勉強になろうかと思います。よろしくお願ひしたいと思います。

きょうは、文化学術講演会ということで「ほほえみのカンブチア」というテーマがつけられております。私もいろんなところが主催しております講演会を聞きに行くわけでございますけれども、そのテーマというもので、やはり見たいなあるいは聞きたいなと決められてしまうことが往々にしてございます。私は、専攻はマーケティングという流通をやっておりますが、流通関係のテーマがついておりますと聞きに行こうという気になります。そうでないようなものでしたら、ちょっと敬遠しようかなというような感じを持ってしまう。

だから、講演のテーマというのは極めて大事だなと感じるんですが、カンブチアとは一体何だろうということでございます。そういう意味では、当初から講演題名を聞いたときに、一体何かという興味を起こさせるような題名がつけられているんじゃないかなと思います。

逆に、あるときに例えば人に誘われて、全然自分が興味のない講演なんかを聞きに行く。もちろんテーマに関して興味はあるけれども、人に無理やり引っ張られて連れていかれて聞いたという場合、最初は何か構えるというのでしょうか、嫌々何が始まるんだろうという態度、アティテュードで聞くわけでございますけれども、それが聞いてみると思わず中に引き込まれてしまう。それによって自分が、こういう考えがあったのか、この人はこう

いうことを考えているんだということで、自分にないものをそこから引き出すことができる。ある意味で自分の肥やしになるというんでしょうか人間性が大きくなるようなことも多々ございます。

カンブチアとは何か、お2人の先生方からいろいろお話しいただけるわけでございます。1人は本学の学生にとりましては先輩に当たる方でございます。一体どういう話が展開されるのか、そしてその話された内容が自分にとってどのような血になり肉になる、あるいは自分を成長させていくのか、そういうことを一つでも酌み取っていただいてお聞き願いたいと思います。

最後になりましたが、重ねて一般の方々のご来場まことにありがとうございます。感謝申し上げます。

では、ただいまから開始させていただきます。

どうもありがとうございました。

【司会】 では始めますが、最初にお2人の講師の簡単な紹介をいたします。

皆さんお手元にパンフレットがいていると思いますが、今日は辻香織さんと北田薫さん、このお2人のお話を伺います。最初に辻香織さんからお話に入りますが、辻香織さんはこの短大の卒業生で、実は私のゼミの卒業生でした。今年はどうも講師がいないかと考えていたときに彼女から北田さんを紹介されて、それならあなたも一緒にお話してください、ということで辻さんも講演をすることになりました。

辻香織さんは、皆さんは、来年就職活動をなさると思うのですが、彼女は就職活動のとき就職しないでカナダへ英語の勉強に行きたいと言ったのです。私は大賛成で、是非行きなさいと言いました。そこで辻さんはお金を貯め1年間カナダに行きました。帰ってきてしばらくお洋服をつくるお仕事をしていました。そしてこれからどうしようかと相談されたときに、今日、お二人のお話する内容の青年海外協力隊といって外務省がお金を出して若い人たちをいわゆる発展途上国に派遣して、自分の持っている技術を使いその国の人々と共に活動をする、という事業があるのですが、それを私がこんなのがあるよというふうで紹介したらすぐ飛びついて、そして2002年から2004年にかけてカンボジアでお仕事をしました。それで、彼女は私から思うと非常に大きな成長をして帰ってきたようです。

そして、もう1人の北田さんは、NTT西日本から現職で参加された方で、システムエンジニアとしてやはり青年海外協力隊、JICAというのですが、その協力隊員として同じ年に行かれた方です。

今日皆さんに聞いていただきたいのは、1人は金沢から、1人は、北田さんは奈良のご出身なのですね。やっぱり地方です。そういうところから、金沢だけが自分の世界じゃないのだと、金沢から外に飛び出して行って、そこでもう1回自分を見直すという、進歩をなさった方なのですね。そういう方から皆さん是非、金沢だけが自分の世界じゃないよというものを学んでほしい。彼らのやった方法と彼らの意思の力、そういうものをこの1時

間ちよつとの間ですが学んでいただければいいと思います。

後で質問の時間がありますから、何でもいいですから聞くようにして下さい。

では辻香織さんの方からお願いいたします。

「ほほえみのカンブチア」

辻 香織 氏

皆さん、こんにちは。私は辻香織と申します。

今日、この場所で皆さんとお会いすることができ、本当にうれしく思います。

これから少しの時間ですが、私がこの短大で学生だった時のこと、そして今回この青年海外協力隊に参加するまでのいきさつ、それから協力隊時代にカンボジアで出会った人たち、特に皆さんと同じぐらいの年代の女性たちのことを、自分のこれまでの活動と共にお話していきたいと思います。

初めに、この「ほほえみのカンブチア」という題目の「カンブチア」ですが、カンボジアでは母国語としてクメール語を使っています。そのクメール語で“カンボジア”のことを「カンブチア」と言います。つまり「ほほえみのカンボジア」という意味になります。

まず第1部では、私がカンボジアで出会った女性たちのことをお話していきたいと思います。

1993年の6月半ば、私はこの短大の1年生でした。そのとき世間で取り上げられていたニュースのナンバーワンは雅子様のご成婚のパレードの様子でした。私たちはそのときの社会学の講義の中で、(そのとき私はちょうどその辺りの席に座っていたのですが、...) 雅子様が外務省での自分のキャリアを、働くことをストップし、皇室に嫁ぐという彼女のケースを題材に勉強していました。当時彼女はとても生き生きとしたパワーに満ちあふれており、昨今テレビなどで見受ける彼女の、大分弱ってしまっている様子はすごく心苦しく感じます。この当時彼女は30代前半で、今自分がそれぐらいの年になって、彼女がこれまで辿った時間を考えると、多分それは自分らしさというものを封じ込めて生きていくというような年月であったのではないかと感じずにはいられません。

さてこれは、私がまさに今この場所の皆さんと同じように講演を聞いていたときの様子です。何が違いますか。

この“制服”ですが、その当時は制服があり、それからこのナースシューズもですが、内履きとして使っていました。しかもタイトスカートはミニスカートで、金沢は特に冬はすごく寒く嫌だなと常々思っていました。それではじゃあということで、みんなの署名を集め制服をなくそうということになり、それを学校の方に提出しそれで今の皆さんが制服ではなく自分のセーターなんかを着て学校に来ているのでは、と思います。

私は、先ほど水谷先生の方からお話がありましたが、この短大に来て社会学に出会えたことが私の人生の中でとても重要なことであつたと思っています。その授業を通し自分自身の重厚な時間を過ごすことが出来ました。それはそれまでの勉強とは全く違い、自分というものに意識を集中し、頭全体で思いをめぐらせ何かを発見していくというようなものであつたからだと思います。

しかしそのときは、まだまだもやもやとしていて確信というものは掴めていないのですが、何か自分という存在に気がついた、そんな第1期であつたのではないかと考えています。

この6年8カ月1週間と3年3カ月3週間というタイトルですが、これはこれまでの自分の10年を計算してみたものです。6年の方は日本にいた時間、3年というのは海外にいた時間です。私はこの大学生時代の卒業間近に就職先を紹介してもらつたのですが、そのときに何げなく言われた言葉が、「元気がいいのはいいけど、じゃじゃ馬は要らない」、ということでした。それはやはり、現実” というものはそのような状況であるのかなということを感じました。でもそのときは、私はそれよりもどうしても海外に行ってみたくという思いが強かったので、卒業後の9月に海外に、カナダでの語学留学を決行しました。

そこで得たものというのは、例えば自分を表現しなければ、大げさに言うならば、それは本当に今日の御飯が食べられないというようなことに直結している体験をしたこと、それがとても重要なことであつたと思います。

その後、帰国後は服を作り始める縁に会い、またそのモノを通しての新しい出会いがありました。そのような感じで4年半が過ぎ、今回の青年海外協力隊に出会いました。それは、今まで自分が続けてきた洋裁の技術を使いながら海外で活動する。もしかすると英語も使えるかもしれない、と知れば知るほど自分にぴったりだと思い、2001年6月に試験を受けました。

この写真は、ことしの7月7日から1カ月間、カンボジアで行った個展のときの写真です。私にとってモノをつくる活動というのは、布が好き、それで服をつくりたい、また心が趣くがままの字を書きたいというような思いで時間が流れ、それはどこへ行くのか、何を伝えるのか手探り状態ではあるけれど、常に私らしさを感じながら生きていきたいということだったような気がします。

ではここでこの青年海外協力隊というのはどういうものなのかをお話ししていきたいと思います。

これは国が行っているボランティア活動です。この星稜短大でも、先程学校の入り口にボランティア部の掲示を見たのですが、開発途上国とその国の人たちのために自分が持っている知識や技術を生かして、共に生活しながら活動を行っていくという事業です。

その職種は約160種と様々で、私の同期隊員の中だけでも、音楽、陶芸、システムエンジ

ニア、公衆衛生、放射線技師、臨床検査技師、日本語教師など多種多様です。

この写真に写っているのはカンボジアで一緒に活動していた隊員ですが、その時期大体40名ほどいました。これらの協力隊員はその国に派遣される前に80日間の訓練を受けなければいけません。

この写真は私が福島県の二本松訓練所で一緒に訓練を行った同期隊員101人です。20歳から39歳までの様々な分野の職種から集まった自称若者たちの訓練中の一コマです。毎日分刻みのスケジュールで、言葉を中心にした訓練、守らないといけないルール、規制もかなりありましたが、この濃密な時間をともに過ごした仲間と言えます。みんなそれぞれの派遣国へと散り散りに分かれていきますが、そんな彼らを思い出すことで世界は繋がっていると感じましたし、また世界を小さく思える気がしました。

ではここで“途上国”というものを身近に感じてみたいと思います。世界の全人口を100人とします。そのうちの2人に飴の袋、一袋が与えられます。皆さんを、150人とする、今日3人の人にそのあめ玉の袋が与えられます。その次の18人があめ玉を2、3個もらえます。続いて、そのほかの20人に砂糖スティックを2本ずつ。そして残りの60人には砂糖スティック1本ずつ。では、この状態を説明しますと、飴玉を袋でもらうのも砂糖スティックでもらうのも、そしてその飴をどれだけもらうかというのも、全く意図は関与していないですし偶然なのですね。ただ、その場所に生まれたという偶然なのです。だから、この写真に写っている子はカンボジアで生まれた、私はただ日本で生まれた、そういう偶然なのですね。

では、ここからが私の活動時のお話なのですが、私は1992年の10月から始まったプロジェクトの最終ステージに参加しました。

ここでカンボジアのこれまでの背景を簡単に説明いたしますと、1970年代から始まった内戦、それからポルポト政権で起こったさまざまな出来事が避けられないものとなります。例えば指導者としての立場であった僧や教師の大虐殺、それから都市部に住む人々の農村部への追放、そしてその場所での強制労働など。その期間に推定200万人が死亡したと言われています。200万人というのは金沢の人口が今45万人ほどですので、その約4.5倍の人がその期間で亡くなったということになるでしょう。

そのようにめちゃくちゃに引き裂かれてしまった国を復興するために、あるいは散り散りになった人々を、家族を、元の地に呼び戻し村の機能を再建することを目標に行われたのがこのプロジェクトです。

1992年にパリ和平協定が締結され、このRDP(ルーラル・デベロップメント・プロジェクト)は、農村開発プロジェクトとして日本政府、カンボジア政府そしてASEAN(インドネシア・マレーシア・フィリピン・タイ)各国の協力・支援の下開始されました。

では、その対象としていた村のお話に入ります。

これはブノンペンからセンターまでの道なのですが、一応“国道”です。この場所は舗装されていますが、こちらの方は途中で赤土のでこぼこ道になっています。ちょうどこの道の脇を入っていくと村に着きます。これはバイクタクシーですが、これが一般的な乗り物です。こちらの車の後ろには猿がいます。日常的にこのような風景が見られます。

では今から村の中の様子を見ていきますね。(ビデオを流す)

これは木を切っているところです。子供がいます。

ではその村までの道ですが(ビデオを流す)、このような光景がその国道に普通に見えます。水平線のように地平線が見えますし、空がとても近くに見えます。夜になると電気がないため星が本当に近くに見えました。

では、ここで村の中の家の様子を見てみましょう。

(ビデオ開始)

田舎の家の様子や人々の生活の様子が伺えます。このような赤土道のため、車が揺れます。ちょっと車酔いしそうですね。

人がしゃがみこんでいます。この人は自転車に乗っています。こちらの人はゴザを持って歩いています。

この人はクロマーといわれる布一枚を体に巻いただけで歩いています。それから女性ですね。

このような藁葺きの家に住んでいます。

これが水がめで、雨の水を溜めその水を飲料や料理などに使います。

それから、このような田んぼが一面に広がっています。

牛もいますね。田んぼを耕すための、仕事用の牛です。

女性が頭の上にたらいを乗せて何か物を運んでいますね。

このような道を通りながら活動を行っている村に向かいます。

(ビデオ終了)

では、ここでプロジェクトが行っていたトレーニングを紹介したいと思います。

私が属していたドレスメーカーングサブセクターは、特に女性の参加者がほとんどでしたが、農業以外の手段で収入を向上させることを目標としていました。まず、多くの村人に洋裁の技術を紹介するために、村へミシンを持ち運びその村の集会所でコースを行いました。ベーシック・コースでは基本的にミシンの技術を学びますが、それ以外にもとても重要な“規則”というものを学びます。例えば遅刻は何回まで、あるいは欠席は何回までなどとても初歩的なものをはじめ、欠席するときの手続きや、作業前の手洗い、物を勝手にとっていかない、あいさつをするなどといったことも義務付けていました。

こちらは出張アドバンスコースの修了式の模様です。ベーシックを修了した受講生のみが受けられるコースです。ここでは自分のサイズを採寸し服をつくる技術を指導しました。

しかし、カンボジアの非識字率の現われだと思いますが、クラスの中では計算機を使うことや、計算が不得意なため自分のサイズを出すことにも四苦八苦している受講生が大勢見受けられました。これは、15歳以上の女性の79%、男性の41%が日常生活の読み書きができない、簡単な内容についての読み書きができないという数字に表れていると思われます。

さて、これはプロジェクトのあるサブセンターで行われていた18歳から22歳までの女子のみを対象としたエンプロイメント・コースです。女子のみというのは工場からの要望の中に、男性はストライキのリーダーになる可能性があるので採用しないということがあり、その必要とされた年代の女性のみのトレーニングとなりました。ここでは就職に即役立つ工業用ミシンを使用しての授業を行いました。

また“働く”という意識をしっかり持たせてほしいという要望も受けました。それは工場では雇ってもすぐに仕事を辞めてしまう子が多くとても困っているということで、村出身の子供たちはたいい学校教育を受けた子が少ないですし、家庭自体も社会のルールの意識がない、親の手伝いだけで育ってきた子供たちがほとんどであったため、トレーニングの意味合いはどちらかという、遅刻はいけない、ずっと座っている、決められたことをやり遂げる、おしゃべりはしない、病気のときは医者から診断書をもらってくる、など“働く場での常識”を体験させる場であったように思います。

これは就職試験の模様です。

この左の紙は戸籍表なのですが、以前は自分の名前や年齢を偽造して就職試験を受けていた村人が大勢おり、18歳未満の子供を雇ってはいけないと法律が制定されてから、工場側も厳しく偽造がないか、正確なものかを確認しながら、アプリケーションフォームに記入させているところです。

右は技術試験の様子です。中国人スーパーバイザーのこのようなおばちゃん達4、5人に取り囲まれながら、更に正確に早くミシンを動かすという試験が行われていました。

この就職のためのトレーニングは、技術もさることながら、何とか工場内の“規則”を体験できるようなカリキュラムに作り変えました。村出身のトレーニングのアシスタント・スタッフに対しても、教える側として“仕事”としての意識を持ってトレーニングを行ってもらうようにしました。

それからこのときの訓練生20人全員が今まで村から出たことのない子たちばかりでしたので、“お泊まり体験プログラム”と称しカリキュラムの一環として自分たち自身だけで公共の交通機関を利用してプノンペンまで出て、下宿先に行き、皆で協力して晩御飯を作りその日、1日を過ごして、翌日お礼を言ってまたバスに乗って村へ帰ってくるまでのプログラムを行いました。

その中で、子供2人の母親は心配の余りその娘の後を付いていき村に帰ってくるまでを見届けたということを後で聞きました。このように、子供たちへの訓練だけでなく、その

家族に対しても“働く”ということを考えてもらい、何度も話し合いを持ち何とかうまくいくように皆で頑張りました。

晴れて工場で働くことができるようになった彼女たちの、RDP卒業生のその後を見るべくアンケート調査を行いました。このアンケート調査で答えが興味深かったのは、まず「就職後、親との関係は変わりましたか。親の期待を感じますか」という質問に対して、「家を建てたり土地を買ったりバイクを買うために貯金してほしいと頼まれた」、「家族のために土地を買った」、「自分で決断するようになった」、「弟をプノンペン的高校へやった」、「隣人からお金を借りなくてよかった」、という回答を得たことです。

また「仕事を持つことによってあなたの生活は改善されましたか」という質問に対して、「好きなものを好きなときに買えるようになった」、「自分自身で決断できるようになった」、「金銭面で家族を助けられるようになった」、「どこへでも好きなときに行けるようになった」、「自分のお金で英語学校へ通えるようになった」、という答えが返ってきました。

この写真の左上の家ですが、この家の後ろに以前の家が見えます。家族7人で住んでいたのですが、その子が頑張って働いたお金で、この前にある家を建ててあげたそうです。約200ドル掛かったということでした。公務員のお給料が月に約20～30ドルですので基準が分かるかと思います。

こちらの木造の大きな家は、姉妹2人が工場で働いているという子供たちがおり、毎月それぞれ50ドルずつ家に仕送りをしていたそうです。そして家族のためにまたお給料からお金を貯めこの家を建てたということでした。大体700ドルほど掛かっているそうです。一緒に写っているおじいちゃんの笑顔が印象的です。

それから、これはすごくカンボジアを表している写真だと私は思うのですが、工場から家までの道のり、毎日1時間ぐらいかけて帰宅する時の様子です。大きなトラックの荷台にギューギュー詰めになって立ち乗りしている様子。一生懸命働いて家族を助けたいという彼女たちは、まさしくカンボジアを支える大黒柱でした。

さて、そのほかの活動として、ドレスメーカー協会というものがありました。工場へ行くのではなく自分の住む村の中でグループを作り洋裁の活動を行っていきたいという女性を対象としていました。

それではカンダムラと呼ばれる村の中で活動を行っていたグループの様子を見てみたいと思います。

ここは一般的、もしくは少しお金がある家です。窓ガラスはないですね。家の下に牛などの動物を飼っています。道を通り過ぎる女性がいます。このように牛を連れていき、その後ろに子供が付いていっていますね。手伝いをしているのですね。

このような村の中で、彼女たちは活動を行っていました。

後ろのポスターは飾りだと思うのですが、ドアも何もないこのような家でした。

この車はプロジェクトで使っていた車で、私たちはこの車に乗って移動していました。

私が赴任する直前に、これらのアソシエーションが設立されていたようでしたが、それはどうもプロジェクトというものによって作られた、自分たちの意思ではじめられた活動ではないような感じを受けました。そそのかされ始まったような、というような気がしています。彼女達はまだまだ意識も技術もついていない状況だったので、私はその2年間で彼らの技術の向上とグループの組織力の向上のための“記録”に重点を置き活動を行いました。

この写真は「お金がない、ない。」と言う彼らに、技術を上げれば注文が入って、良い製品を作れば注文がまた来るんだということを実感してもらおうと、プノンペン協力隊有志と共に“ポロシャツプロジェクト”を行ったときの一枚です。

私たちJOCVが大使館や協力隊関係者から注文を取り、布や材料を買いに行き、最終段階でこの村のアソシエーションのメンバーの下には160枚の注文が入りました。この写真はそのポロシャツを作っている時の様子です。

さてここは“トラムクナセンター”と呼ばれる場所なのですが、私たちが住んでいたところです。私はこの3畳ほどの虫三昧の、木造プラス床はコンクリート製のドミトリの一室で生活していました。慣れるまで大変でしたが、“住めば都”で共同生活の醍醐味を満喫しました。

例えば、JOCVは私の他に8名一緒に生活していたので、このように誰かの誕生日には皆でお祝いし、日々の忙しさを忘れ、楽しく過ごすこともありました。

この彼女は識字教育の分野、またこちらの彼女は公衆衛生の分野、そして私の前任者の婦人子供服隊員など、色々な分野からの協力隊員が集まってこのプロジェクトに参加していました。そしてこの木造のカンティンと呼ばれる場所が皆の共同スペースの一角です。このような場所で御飯を食べていました。

あとは、日本人だけではなくASEANからの専門家たちも来ていたため、(彼はインドネシア人なんですけれども)、非常にインターナショナルな環境でもありました。これは最後のお別れパーティーのときにインドネシア人の専門家の方がクメール語でスピーチをしている様子です。ここに映っている人数で、ほとんど全部のRDPスタッフなんですけれども、ちょっとビデオを見てみましょう。「プロジェクトは終わってしまうけれど、またみんなで集まれるといいですね。」というふうなことを言って、「私のクメール語は分かるか？」というふうに質問すると「分かる——！」という答えが返ってきて、みんなで笑っていたところです。そして「ソーム オークン（どうもありがとう）！」というところで終わっていますね。

そういうトラムクナの活動もありました。

さて、ここからは2003年12月半ばから、私の配属されていたプロジェクトが終了した後の話になります。

これは、バントラバエク職業訓練校といいまして、Japan Cambodia friendship training centerとして数々の職業訓練を行っているセンターです。ドレスメイキングを初め印刷、コンピュータ、木工、機械などなど多くの学生が学び、そして働いていました。

私はドラえもん音頭を教える“盆踊りの先生”として活動していた、と言っても過言がないほど、彼らは彼らだけで仕事を回していました。その時間は、私にとってクメール語のリスニング月間強化期間、日本語の宿題をチェックしてあげる人、日本人のお客さんに対して通訳者、そのような余り重要さはない存在だったと思いますが、ここで過ごすことができ私はとても幸せで、そしてそんな彼女たちが私は大好きでありました。

帰国間近のある日のインターネットライブ授業の一コマです。

日本の中年の男性から、「カンボジアではいろんな人権問題があると思いますが、そのことについてどう思うか。」という質問が出ました。しかしこのドレスメイキングで一生懸命仕事をしている女の子たちにとっては、そんなことよりも出てきた日本の大学生の男の子にとってもはしゃぎながら、「カンボジアに来たいですか？」とか「何歳ですか？」などまるで合コン状態で質問を返していたことが印象的でした。

このときに思ったことは、おじさんはカンボジアには問題がいっぱいあるものだとすることを前提としてお話ししていますよね。でも、一方この女の子たちはカンボジアに住んでいる状態であるため、その問題とされたことを問題としては捉えていません。そこが日常であるためです。

また、カンボジアと云わず日本を見ても人権に関する問題は本当にたくさんあります。カンボジアだから問題はあるはずということではなくて、こういう彼女たちの笑顔が今のカンボジアの現実なんだということを知ってもらうことが重要だと感じています。

バントラバエクの皆さんとは本当に仲よくして頂き、お世話になりました。

この方がブッター先生という先生なのですが、以前、バントラバエクに私と同じような協力隊員が入っていた時に彼女は日本に研修に行った過去がありました。年月がたった今でも、日本はすばらしい国と私に彼女は言っていました。彼女は「これまで、自分が受けたチャンスに感謝して、これからはその経験をした自分が、弱い立場のクメール人を助けていきたい。」ということを私に語ってくれました。私はその言葉を聞いたとき、その一言を聞くために自分はカンボジアに来たのだなと思いました。

私はこんなに勤勉なクメール人を他に知りません。朝7時から仕事を始め、仕事が急ぎだったり溜まったりすると、皆で土曜も日曜日も返上し夜も家に帰らず遅くまで仕事を続け、そこで泊まったりもしていました。総勢50名ほどのスタッフが一丸となって仕事をこなしています。そんな彼女たちは、大体皆さんと同じ二十過ぎから30歳ぐらいまでが多く、早婚が多いカンボジアではかなり珍しい環境でありました。

しかし、やっぱり手に職を持つ女性性は結婚しなくていいのかなというような気が、その

ときしました。仕事を持っていれば、父親が常に弁当を届け夕方暗くなれば弟がバイクで迎えに来、プノンペン唯一のデパートメントストアで新しい靴を2足買うことができる。何より忙しいことはうれしいことと言い切る彼女たちは本当にすてきでした。

私のカンボジア2回目の帰国時に、忙しい中見送りに来てくれたのは彼女たちでありました。「ニャックルー（先生）、また来てね。私たちはどうやっても日本になんか行けないから。」と、その言葉を思い出すたびに、彼女は本当にたまたまカンボジアに生まれて、私はたまたま日本に生まれたただけなのだなということを痛感します。

さてここで、「あなたと繋がるこの海と空」というフレーズなのですが、この写真の中の彼女たち3人は、日本では実は学校の先生をしていました。この彼女は養護学校の先生、こちらの彼女は小学校の体育の先生です。それでも生き生きと飛び跳ねているこんな彼女たちを私はすごく好きなのですが、この言葉は、私が訓練中に思っていた言葉です。本当に苦しい訓練と一緒に頑張った仲間が、今自分が見ているこの海や空とこの地球のどこかで繋がっていると感じ、またこの書を書きそれを買ってくれたアメリカ人のキムさんという女性と出会ったこと。それは実は彼女の夫が1年前ぐらいに亡くなったことを私に告白し、そして「彼もこの言葉を理解してくれる。だから、私はこれが欲しい。」と打ち明けてくれたことによって、私はその会ったこともないこの女性の夫とも繋がった気がしたこと。これまでにカンボジアをはじめ、出会った人々を思い出すことで、私は自分がどこにいてもその人々を介し世界を身近に感じ、更にはもっと新しい世界を知ることによってその輪がますます広がっていくことを感じています。

ではここで、皆さんにお渡ししたプリントですが、こちらの「終わりに—— だって未知なる可能性のあなたへ 思いを馳せ、自分で感じ、そして繋がろうのコーナー」の方です。

こちらの写真ですが、彼女は私のアイドル、オノヨーコです。ちなみにオノヨーコはご存じですか。ジョン・レノンの奥さんだった人ですが、それよりもずっと以前から彼女は芸術で若いときからやってきた人です。先日その彼女を新聞で見たのですが、今年なんと彼女は71歳になっていました。この赤いジャケットに両手を振り上げ、観客に応えているその姿は、私が持っている過去の記憶と同じ。彼女が言うには、「1人で夢見る夢はただの夢、一緒に夢見る夢は現実となる。」ということだそうです。

そして、本当に最後に。この書は私が書いたものですが。これは「乱れ髪」からの短歌です。この歌は今からなんと95年前に創られた歌だそうで、そのとき与謝野晶子は22歳だったそうです。その「乱れ髪」の歌の一首を書きました。それを今、俵万智さんという歌をつくる方がいらっしやるのですが、彼女の訳とともに載せてあります。

「その子二十 櫛に流る 黒髪の おごりの春の 美しきかな」

「二十歳とはロングヘアーをなびかせて畏れを知らぬ春のヴィーナス」

あなたたちはヴィーナスなのということです。

自分が知れば、もう繋がります。勝手に繋がっていることにしたとしても、でもそんな人が多くなれば嬉しく思いますし、空間や時間を超えて世界を自分の頭の中でぐると見渡し、その中で自分がやりたいこと問い、進み出せばよいと思っています。

私たちは偶然日本で生まれ、その可能性を持っているのだから。

以上で、私の、第1部のお話は終わりたいと思います。ありがとうございます。

皆さん、こんにちは。北田薫です。よろしくお願いします。

カンボジアで、この4月に2年間の任期を終えて日本に戻ってきました。

もともとNTTに勤めていて、教育系の仕事をしていました。

今から六、七年前、2002年に学校で総合的な学習の時間が始まるというので、そのコンテンツを準備するための仕事をやっていました。

その中で、学校にコンピュータとかネットワーク、インターネットを100%つないでいき、Webサイトやメール、遠隔授業等を授業の中で活用していくというものにとりくんできました。

特に今回、遠隔授業、交流授業である「インターネットライブ授業」というのをカンボジアで立ち上げ、実践したことについて話していきたいと思っています。

ちょっとお聞きしたいんですけども、この中で実際に小中学校のころというか、以前、総合的な学習の時間を受けたことがある、参加したことがある人、手を上げてもらえますか。——ないですか。

皆さん、総合的な学習の時間は知っていますね。知っている人、手を上げてください。

——、名前ぐらい知っていますよね。

そういうことをやっていました。

これから特に遠隔授業の話をすることになるんですけども、簡単に言えば学校の教室とほかの学校の教室を結んで交流することです。

一番最初に日本の学校と海外の学校と結んだときというのは、相手はハワイでした。日本が早朝で、ハワイは夕方。そういう状況で子供たちが直接話すという形をつくってやったんですけども、それは本当に僕にとってすごい衝撃的やったんです。この授業が僕の子供のころにあったら、すごい影響されたと思います。

そういうすごい授業を5年位前からしていました。

ところが、そのころ海外とやるということになると、やっぱりスタッフ全員が日本から向こうへ行き、テレビ電話を使いますから国際電話をずっと試験のときからつなぎっぱなしということで、すごいお金がかかります。結局、数百万円というお金が一回の授業にかかる。ということは、多くの人が体験できないということで、僕はそこをIPテレビ会議シ

システムを使えば、お互いの国の市内通話料金とプロバイダーの使用料だけ実現できる戸考えました。

非常に低価格で実現できます。それを使うことが出来ればたくさん子ども達がそのすばらしい授業を体験できると思いました。

でも、それを実現するには私が海外に一定期間行く必要がありました。

また、ほかにも私には海外に行きたいという要因はあったんですけども、海外で働きたい、生活したいという思いもありました。

僕は海外に行って働いたり生活したりしたかったんですけども、事情がありまして会社をやめていくということではできなかったんです。

そのころ、友達が青年海外協力隊でメキシコに行っていました。

それで、現職参加といって会社をやめずに参加できる制度があるというのを聞いて、ぜひそれは行きたいということで試験を受けました。

上司に猛反対されましたが、海外の子供たち、日本の子供たちにとっても絶対おもしろいことになると思ったんで行くことにしました。

僕はもともとシステムエンジニアじゃないんですがシステムエンジニアという枠で行きました。

そのころ会社での仕事では、教育系のウェブコンテンツとかウェブデザインをやっていたんで、そういうのはたまたま JICA の枠ではシステムエンジニアとなっていたということで、システムエンジニアの試験を受けました。

システムエンジニア隊員は学校への配属が半分、省庁への配属が半分というような募集人員だったので、面接で私は教育に関することをするために学校で活動したいと話しました、合格通知は何とか来たんですが、希望とは違い省庁に入ることになったんです。それがカンボジアの計画省統計局というところなんですけれども、ここに行くことになりました。

僕は最初この通知が来たときに、実はやめようかと思ったんです。やめようというのは、次回受けようかなと思ったんです。ところが、僕が合格した前の年に落ちてるんですね。落ちていて、年齢も今は41歳なんですけれども、受けたときは38歳であと数回しかチャンスがなかったんです。システムエンジニアは倍率がすごく高く、僕が受けたときで合格率が10倍でした。

多分、今回まぐれで通ったと思っていたんで、次回というのは無理やというのがあって、どうしようか相当悩みました。それで、次回受けるか今回行くかということを悩んだときどうやって決めたかといったら、まず行くことが大切というのと、省庁の仕事はボランティアの仕事になるわけですから、その仕事のあいた時間でボランティアでやったらいいんじゃないかと思って、そうすることに決めて行くことにしました。

最初、カンボジアに入りまして、僕は首都のプノンペンというところに住んでいました。

ここが職場で、(スライドの写真をみなせながら)この方はベイ・ヒアンさんといって直属のダイレクターになりますかね。その方と出会って、赴任当初の写真です。

仕事の内容というのは、これは結局、計画省というのは日本でいう総務省なんですけれども、統計局なので統計のウェブサイトを立ち上げるということでありまして、それを立ち上げるために外注するんですけれども、メンテナンスとかできないといけないだろうということで省庁の方にウェブサイトの制作についての講習をやっていました。これをやりながら、あとコンピュータが壊れたとか調子悪いとか相談があったときにそこへ行って、みたりしていました。

その合間をねらって、昼休みであつたり仕事終わってからであつたり土日であつたりというところでインターネットライブ授業を早速立ち上げるということで動き出しました。

インターネットライブ授業というのは、結局、I Pテレビ会議システムを使うんですね。日本の教室とカンボジアの教室をつなぐことを実現するまですごい難関がありました。

まずカンボジアの学校の見学に行くというのがあって、でも最初言葉は余りできないくらいさもあったんですけれども、まず学校の先生にも確認をしないとけない。インターネットですから電気も要りますし、コンピュータを使います。電話回線も必要です。

カンボジアの学校は普通、電話がないんです。

電気はあるところが多いですが、田舎になるとありません。

あと大切なのは何よりも参加する生徒の先生が内容を理解して取り組むこと、そういうのをちゃんと理解するような熱心な先生を見つけないといけないということです。

カンボジアの場合、下手したらこういうことに参加するのに、何ぼくれる？ という答えが返ってくることも考えられます。お金を請求するパターンというのがあるんです。そういうのは普通にあつたりします。そんな中で、この内容を把握してくれて、ぜひ子供たちのためにやりたいという先生を見つけてやるのが大切です。

あとはI Pテレビ電話の調査ということで、その当時、電話回線に対応するI Pテレビ会議システムというのはほとんどなかったんです。それを見つけないといけない。そのためには現地で実際に試験するんですけど、電話回線が2つ要ります。コンピュータも2つ要ります。

私の職場の計画省では僕が試験で使える電話回線はありませんでした。

携帯電話が発達しているんですけれども、有線の電話が発達していない現状です。

それで、教育省という日本の文部科学省にあたるところに行きました。

教育省に日本人の専門家が入っていたのでその方に教育省初等教育局長という方を紹介してもらい、この内容をお話して教育省でこういうことをやるので試験をやらせてほしいんだという話をし、オーケーもらいました。

教育省には電話回線は二、三本しかないんですけれども、そのうちの1階と2階の事務所にある回線の二本を借りました。

1 階と 2 階を走り回りながら試験して、どのアプリケーションが一番声を通るか、絵が出るかというところから始めました。しかもコンピュータは一台私のものがありますけど試験にはもう一台必要でした。

そこで JICA 事務所に借りることにしました。

JICA 事務所に行くときも自転車なんです。

朝、計画省へ仕事にいて、昼の休憩時間に JICA 事務所へ行って、JICA 事務所から教育省へ行って、炎天下40度の中、自転車で走っていました。

毎日そういうことを続けながら、最終的には何とかアプリケーションを見つけることができました。

次は、ボランティアを引き受けてくれるカンボジア人通訳を見つけること。

これは日本語を勉強している大学生が望ましいだろうと考えました。

「インターネットライブ授業」実施の1回目はまず試験的にやってウェブ公開して、日本の先生方にこのウェブサイトを見つけてほしいと思いました。

カンボジア側の学校はこっちで僕が走って見つけますので、これに参加したい日本の学校の先生は「ライブ授業」のウェブサイトを見つけて応募してほしいと考えました。

次は、私が訪問したカンボジアの学校を紹介したいと思います。

この写真はコンボンスプーという田舎の小学校なんですけれども、1棟だけなんです。こういうふうに、子供たちや先生としゃべったりしてました。

たまたま近くを通りかかった学校です。当然電気、電話はありません。でも、すごく先生もフレンドリーで子どもたちも元気でした。

次の写真、これはライブ授業のために行きました教育省に紹介してもらって行った学校なんです。プノンペンで、すごいマンモス校なんです。3階建ての校舎ですが、屋上に木造の校舎を建てて4階にしているんです。

ここの学校の生徒数なんですけど、小学校7,656人です。先生が190人。カンボジアでは平均的に1クラスは50人の生徒がいます。電気はあるんですけど電話がない。先生にやる気がない。

どういうふうにやる気がないかというと、僕が教室をのぞくと子供たちに何か書かせていました。本をうつし書きしているようです。先生は座って、なぜかサトウキビジュースを飲んでいました。それで、先生は僕が通りかかるのを見て、サトウキビジュースをぱつと隠していきなり子供たちに教えている振りをしました。

次の教室に行くと、コピーしたようにサトウキビジュースを飲んでいるんです。

僕は、一体何なんだ。と思いました。これが本当に70%くらい、この学校には先生方はダラーッとしてサトウキビジュースを飲んでいる習慣があるわけです。

ひどい先生になると、僕の姿を見たときに、子どもたちに指導しているところ見せるた

めに子供たちに怒り出す先生がいました。

考えられない光景ですが、先生がそういうほうになるにも理由があるんです。

カンボジアでは、先生を含む公務員の給料が非常に安いんですね。計画省もそうでした。一月働いて二、三十ドルなんですよ。

確かにカンボジアは物価は安いですが、一家4人が普通に生活しようと思ったら家賃を含め約100ドルくらい必要なんです。

一家が生活するのに100ドルくらい必要なところに二、三十ドルしか渡してない。だから、学校の先生も結局はそこで働いても生活できない。そのためアルバイトをしなくちゃいけないため学校を休むことが多かったです。例えば奥さん、だんなさんが給料のいいところで働いていて、ある程度お金が入ってくる人が家族にいるというような状態であれば、ちゃんと先生としての仕事もできるんですけども、その給料では、なかなかちゃんとできない。やっぱりそうやってくるといい人を採用するのも難しくなるようです。

この問題は公務員全体にわたることのようです。

(次の写真を見せながら) 次、プノンペン大学。これはインターネットについて講義をした時の写真です。

次はケップという田舎の職業訓練校なんですけれども、職業訓練校にはいろんなドレスメーカーリングであったり機織りであったり染め物であったり、最近では田舎の職業訓練校もコンピュータの学科があるんです。

なぜかコンピュータといえばワード、エクセル。インターネットといえば電子メール。という狭い利用方法なんです。

しかし、コンピュータは皆さんすごく好きです。

手前におられるのがお坊さんなんです。お坊さんが職業訓練校に来ているというような不思議な状況ですね。

(次の写真を見せながら) ごみの山があつて、どこの途上国にもありますね。プノンペンじゅうのごみがここに集まっています。

ここには、ごみの山の中にごみでつくった家があります。ここのごみの山で再生ゴミを拾って売って生計を立てている家族が多いんです。

家族で住んでいますから子供もいます。ですので、その横にはドレスメーカーリングの職業訓練校があつたり、理容師の学校があつたり小学校があつたりするんです。

ごみの山には自転車で行きました。

ごみの山へ自転車で行くと、二、三十センチはまりながら走るのすごいです泥だらけになります。

話しは、戻りますけれども、インターネットライブ授業に必要な電話回線、コンピュータカメラ、マイクそしてスピーカー等を準備し、学校に見学に行き、アナログ回線でも使えるIPテレビ会議システムのアプリケーションの検証を行ったりと、いろんな試行錯誤した後、初めての第1回インターネットライブ授業をやりました。

宮崎西小学校6年生と、カンボジア教育省の初等教育局長と小学生数人という、実験的にやった回なのでこういうメンバーでやりました。

この方が初等教育局長。(写真をみせながら)

これはスーパー通訳のマリちゃんです。この子はいきなり当日あらわれました。

今は、簡単な通訳は私がやりますが、当時はカンボジアに来て半年にもならなかったの
で、まずクメール語を英語にして、英語を日本語にするという通訳をやる予定だったんで
す。当日、僕の友達がマリちゃんを連れてきてくれました。

この子は2年間東京に住んでいたため日本語がすごく上手にしゃべれます。この子を急
遽通訳に入れることで、クメール語、日本語という簡素化した形ですめることが出来る
ようになりました

そのシーンをちょっと見ていただきます。

(映像をみせながら)

マリちゃんの通訳でこのように日本の子供たちとカンボジアの子供たちがしゃべれると
いうことになりました。

初めての「ライブ授業」は見事に成功し、こういった映像や写真を使ってWebサイトを
立ち上げました。

このサイトを見て興味のある日本の先生からの参加の希望を募る為です。

その後、マリちゃんの小学校に見学に行きました。

(写真を見せながら) なぜかこの小学校には、こういう市場みたいなものがあるんですよ。
プノンペンプノンペンの小学生の金遣いの粗いのには驚きます。マリちゃんも何を買おうかと物色し
ています。

この後、マリちゃんの家まで行っただけですけども、帰るまでに3つ何か買ってました。

(次の写真を見せながら) インターネットライブ授業第2回はオーストラリアとやったん
です。オーストラリアのセント・トレース小学校6年生、そして専門家の方と私というこ
とで行いました。

オーストラリアに日本人の方が小学校にボランティアに入っておられて、ほかの日本人
を見せたいということの要望があったので、そういうような形でやりました。

このときに新兵器を使いました。(笑) (写真を見せながら) これはプロジェクター、新
兵器です。この後ろでスクリーンが出ています。マイクを2つに分けて使います。

日本では当たり前でもカンボジアでは画期的な新兵器ですから、全部そろえるのにも意
外と苦勞するんです。

第3回、(写真を見せながら) こういうのも使いながら、富山市立東部中学校3年2組と
私を含む青年海外協力隊員。

これはどういうことかという、基本的にはカンボジアの教室、カンボジアの子供たち
と日本の子供たちとやっているんですけども、そのときに僕は、しょうもない調べてわ

かる質問はしてほしくないと思っているんですよ。

例えば、日本の人口は何人ですか、カンボジアの面積はどのくらいですか。それは調べてわかるようなことを一生の中で体験できるかできないかのし間の中で質問するのはもったいないと思っていました。

学校では何がはやっていますかとか、食べ物は何が好きですかとか、そういうような質問をする方が絶対おもしろいです。でも質問の規制はかけたくなかったので、先に日本の生徒にはカンボジアについての基礎情報をやったり、カンボジアの生徒には日本の基礎情報をやる。そのことによってしょうもない質問がなくなるかなと思いました。それでできるところは二部構成で「ライブ授業」やるようにしました。

今回はその第1部です。

(写真を見せながら) カンボジアのいろいろな基礎知識について、ほかの協力隊の協力を得て、このようにやっていきました。

(会場の先生の座っておられるところをしめしながら) そのときの先生が今日そこにおられます。ちょっと手を上げてください。東部中学校の五島先生です。今日は来ていただいてありがとうございます。

この次の次は、東部中学校の第二部である国際交流授業があります。

今回の小学校間のライブ授業のために学校調査を行いました。

(写真を見せながら) 小学校。これは次回のためにまた見に行ったんですけど、プノンペンの小学校はあまり良くない小学校が多いと思っていたんですが、違うんですね。この小学校は雰囲気もいいし明るいし、机の上にペットボトルも置いてないです。先に紹介したサトウキビジュースを先生が飲んでいた学校ではうわーっとみんな机の上にペットボトルを置いてました。ここは全然置いてないです。

授業の内容も、ちゃんと先生が教えていました。先生が教えてましたって当たり前の話なんですけど、ちゃんと教えてました。すごいなと思って。

何でこんなに同じプノンペンなのに違うのか。絶対校長先生が良い先生なんだなと思って、校長先生と話をしにいったら、すごいんですね、校長先生の考え方が。

本当にいろいろ子供たちのために考えておられていい先生という感じで、教育の話が出来るんです。

(写真を見せながら) これは休み時間に撮った教室でゴムとびをして遊んでいるところの写真です。

こういう教室の窓の向こうは廊下になっているんですけども、そこには、このように先生の赤ちゃんがハンモックで寝かされてました。微笑ましい光景です。

次、インターネットライブ授業の第4回です。

先ほど紹介したプノンペンのいい感じのボーンサラング小学校を相手校に選びました。

宮崎西小学校とボーンサラング小学校。このときは教育省でやったんですけど、2階から3階へ線を張ったんです。

そのせいか断線で、もう時間は押しし、国営テレビ局のカメラが来て撮ってたしで、たいへんでした。

時間は押ししましたが、何とか接続でき、特に問題なく完了しました。

(次の写真を見せながら) これがインターネットライブ授業5回、前々回の2部構成の2部です。

これは日本側のコンピュータの画面です。これはカンボジア側のサリット先生です。この先生もすごくいい先生です。

(会場の写真を見せながら) ここに計画省の職員がいますけれども、これは私の職場である計画省の生徒です。この人たちにウェブサイト制作についての手法を教えていて、インターネットというものは、こんなこともできるんだというのを見せるために呼びました。

これを見ることによって、Webメールの活用しか知らなかった職員にインターネット活用の広がりを知ってもらうことが出来ました。

このときは、日本側はPHSで行いました。日本の学校、(写真を見せながら) これはそちらの五島先生です。この中学校は雪の降る富山なので生徒さんが、カンボジアは雪が降らないですから雪だるまをつくって見せてあげるということで見せてくれました。

(写真を見せながら) それを見ている時のカンボジアの生徒の写真です。ちょうどこのときに撮った写真です。(日本側の生徒が雪だるまを見せている時の写真を見せながら) すごくいい顔していますね。

次に、プノンペンの中高等教育教員養成学校。日本の高校の先生から英語で交流できないかという相談を頂いて行ったものです。

英語というキーワードで「ライブ授業」コーディネートするためカンボジア側はどの学校が学校がいいだろうと思ってさがしました。

それで見つけたのが、中学校の先生になるための中高等教育教員養成学校の英語と国語の教師になるために勉強している語学学科とやってはどうかと考えました。

年齢的には高校を卒業してからその学校に入る人が多いようです。

学校を見学しに行った結果、その学校でやることになりました。

本番では、両方とも英語を使う国ではないので、聞き取りずらかったようです。

私の感覚では、カンボジアの学生のほうが英語は上手だったように思います。

中学校の先生になるための勉強をしている人たちですから、当然ですね。

(写真をかえて) 「インターネットライブ授業」の第7回です。これはNGOから依頼があつて、地球市民フェスタinおかやま2003というイベントで行いました。

そこに先生方が集まるから、ITを活用した国際交流を見せたいということでした。

集まった先生方に体験してもらうという企画にしました。

カンボジア側では、私の計画省の職場の事務所でやりました。

カンボジアに赴任して一年くらいたったころ、私の事務所に電話を引いたので簡単に「ライブ授業」が可能になりました。

そこで私が計画省の仕事以外でこんなことをやっているということを職場のダイレクターにもわかってもらうために、参加してもらいました。

ダイレクターは楽しそうに日本の会場の先生方に話しかけていました。その中で、カンボジアのこれは何でしょうという、クイズをやりました。

（竹細工の写真をみせながら）これ、何だと思います？（星陵短大の会場の方々にも質問）何かわかる人。

わかります？

これ、カウベルなんです。普通、カウベルって金属のイメージあるじゃないですか。竹なんです。コンコンコンコンとすごくいい音がするんですよ。

国が変わるといろいろなことが変わるもんですね。

こんな感じで日本の先生方に体験してもらいました。

第8回のインターネットライブ授業は「スポーツフェスティバル」というイベントの中でやりました。

プノンペンのおリンピックスタジアムがあるんです。そこでスポーツフェスティバルをNGOがやるというので、その様子を見せるということで行いました。そのNGOというのは、有森裕子さんのNGOなんです。（写真を見せながら）「インターネットライブ授業」でもゲスト出演してもらっているところです。

日本側の学校は岡山市立芳明小学校です。きょうは岡山から先生に来ていただきました。（会場にきていただいた先生を紹介）芳明小学校の福田先生です。

ライブ授業で知り合いになった先生がたくさんいるんですけど、その前から仕事でいろんな学校の先生とか博物館の方とか知り合う機会があって、特に先進的な教育の情報化の形をつくっていく、今ないものをつくっていくということにかかわっている人たちというのはすごくいい人が多いです。本当にこのライブ授業で知り合った先生とは仲よくなっています。

わざわざ岡山から来ていただきました。

今回、一応案内したんです。そしたら、「行きます」と言う答えが返ってきて「え、来るの」という感じでした。

遠いところからわざわざ来ていただいて、本当にありがたいことです。

（手伝ってくれている方々が写っている写真をみせながら）このライブ授業をやっていくにつれて、ほかの青年海外協力隊のメンバーもどんどん手伝ってくれるようになったん

です。

最初1人で初めたんですが、途中からは、たくさんの人たちが手伝ってくれています。

(次のライブ授業の写真を見せながら) ここは孤児院です。2部構成の第1部ということで、茨城県立結城養護学校と青年海外協力隊小学校教育のK先生。

日本では養護学校の先生をやっておられて、カンボジアではさっき紹介した孤児院の先生をやっておられます。この生徒同士を会わせるというもくろみと、日本の生徒にとっては久しぶりに先生と話をさせたいというので実現しました。

(写真を見せながら) これが日本の生徒、これがこっちの孤児院の子供たちです。第一部の日本に対してカンボジアについての基礎授業は計画省でやりました。(白い大きなボトルの写真を見せながら会場に質問) これは何でしょうというシーンなんですけれども、これは何だと思いますか。

前の人、これは何でしょう。何だと思います？

ミネラルウォーターのペットボトルなんです。20リッター入りの。

これは、中身1ドルです。僕は半分以上自炊していたんで、これが1週間に2本なくなるんです。

(今度はカンボジアの子供たちに対して日本についての基礎授業をやっているところの写真を見せながら)

カンボジアの子供たちへの日本についての基礎授業です。

今、日本語で知っているのは、ありがとう、こんにちは、バイバイでした。

日本の四季とか面積、人口について授業をやったわけです。

(第10回のインターネットライブ授業の写真を見せながら) 次に、先ほどの芳明小学校の生徒のライブ授業です。カンボジア側がスナーダイクマエという孤児院です。これはアンコールワットがあるシェムリアップという町にある孤児院です。その孤児院でやりました。(孤児院の教室の写真を見せながら) これはごらんのとおりに教室に壁がありません。

これも基礎授業をやりました。

(日本についての基礎授業のビデオ映像を見せながら、PCにマイクをあてて会場の皆さんに聞かせながら) これ、コンピュータのスピーカにマイク当ててやってるんですけど聞こえますか。

インターネットライブ授業って何？という説明をしているんです。

(写真を見せながら) 本番前にスクリーンを設置しなければいけないです。ところが、壁がないし、すごい灼熱の場所ですから、明かりが入ってきてスクリーンの映像なんか見えないんです。それでどうしたかといったら、孤児院ですから寝るところがあります。子供たちの毛布というか敷布を持ってきて、みんなで壁をつくったんです。本当に手づくりの授業です。(写真をかえて) 外から見たらこんな感じです。

授業の内容をちょっと見ていただきます。

これは後ろの福田先生の声も入っています。(ライブ授業本番のビデオをみせながら)これ、福田先生の声です。「質問のある方、手を上げてください」と、聞こえますか? 好きなスポーツはバドミントン。

(日本側スクリーンに映っているカンボジアの生徒の写真) 今、話していた人がこの人です。これは日本側の映像です。このように割ときれいに映っています。

芳明小学校から「世界に一つだけの花」を歌ってもらって、スナードイクマエからは「島唄」を歌ってくれました。日本語をすごく勉強されて非常に上手だと思いました。僕よりうまいです。

第11回インターネットライブ授業は、第9回第2部でK先生の生徒同士を会わせることが出来ました。

お互いに日本の基礎授業、カンボジアの基礎授業を第一部で行い、今度は第二部の交流授業です。

養護学校と孤児院ということでやっていたんですけども、このインターネットライブ授業をやるときに何を思うかといったら、自分で考えてしゃべったことに、答えがその場で返ってくる。言葉が違う国、そして、離れている国ですよ。

それって子供にとって本当にすごいことだと思うんです。

これを体験した子供たちが大人になっても、この体験を覚えていてくれて、一人でもその後の進路に影響があったということになれば、うれしいなということでやっています。

また、これをやっていてこちらがカルチャーショックを受けることってたくさんあります。

どんなことかという、今までのを数回見てもらいましたが、必ず1回出てくる質問があるんです。というのは、「あなたは何が好きですか」と、カンボジアの子供は絶対これを質問するんです。

何でこれを聞くんですよ。しかも、日本人的には「あなたはどんなスポーツが好きですか」「食べ物は何が好きですか」、何かカテゴリーを言うじゃないですか。ところが、カンボジア人はカテゴリーを言わないです。「あなたは何が好きですか」、絶対そうなんです。これを訳す私の方は、そのまま訳すと、日本人は、わかりにくいやろうなと思うんです。

僕の想像では、もしかしたら日本って、文化が進んで、スポーツとか食べ物とか種類が多いですね。そういうものが多いところというのは頭の中が自然とカテゴリーで整理されるんだなと思いました。

カンボジアはスポーツもすごく種類が少ないです。

そのせいでカテゴリーの概念がないのかなと思ったりするんです。

(カンボジアから日本に質問をしている写真を見せながら) 今回のこの彼が「あなたは何が好きですか。」そしたら、一瞬、日本の子供も考えて「野球が好きです。」と答えまし

た。その場合、日本人の子供が好きなのは野球が多いんですけども、これをまた通訳するときに困るんです。なぜかという、カンボジアには野球というスポーツがないんです。サッカーとバレーボールはあるんですけども、野球というものがないので言葉もない。しょうがないからボールを投げたり打ったりするものやということで説明します。が、それだけでは不十分ですし、それ以上長々と口で説明しても意味がないと思うと、いつも困るんです。

その後、「あなたは何が好きですか」と、日本の子供は聞き返すんです。この人の答えた答えに、すごく僕が疑問に思っていた答えがあったんです。カンボジアの生徒は「僕はサッカーとバナナが好きです」と答えました。普通、日本人の子供は絶対にサッカーとバナナが好きって並列に並べて言わないですね。これが本当にカテゴリーという分け方、先進国的なカテゴリーという分け方がないんだと思いました。僕にとってカルチャーショックだったというか、本当に驚いた答えでした。

僕は、そういうやりとりがおもしろいなと思っていたんです。

この後また、想像外のことが次の質問にあったんです。

日本の子供がカンボジアの子供に、「カンボジアで有名な歌手はだれですか」と聞いたんです。それはどっちかといったらおもしろくない質問の部類に入るんです。なぜかという、歌手の名前を聞いたところで、知らないので「ふーん」と言ったら終わりなんです。そこで、(カンボジアの生徒の写真をみせながら) この子がだれだれが好きと答えました。日本の子供がすかさず「歌ってください。」と言ったんです。そのときに、カンボジアの子は「えーっ」とびっくりしたんですよ。えっ、歌うのと。

すごいびっくりしたし、後ろにいる友達もうわーっと盛り上がったんです。

これって、こんなに距離が離れているのに、インターネットに感情がのったというか、どきどきがインターネットの線にのったということなんです。それができたというのが僕はすごいなと思いました。僕にとってカルチャーショックでした。

カンボジアに生徒が最初恥ずかしがりながらも、すごく上手に歌ってくれました。

(カンボジアの生徒が歌っているビデオ映像を見せた後) 日本から大きな拍手があったんです。すごいことだと思います。その後、ライブ授業でもこの質問が割と繰り返されて、しまいには「有名な踊りは何ですか、踊ってください」と言っていました。

僕は41歳ですから非常に古い話で、お楽しみ会とかクリスマス会とか小学校のときにあつて、そういった催しするじゃないですか。あるのかな、今。

以前はあったんですけども、ライブ授業は、カンボジアと日本で違う教室でやっているんですけども、両方の子供たちの雰囲気は、一つの教室でやっている感覚になったんです。すごいおもしろかったです。

(写真を見せながら) 最後、第12回はバントラバエク職業訓練校ということで、やりました。日本側は熊本のNGOで「熊本城さくら祭り」国際交流イベント会場というところ

とつないで、職業訓練校のドレスメイキングのクラスとの桜祭の会場に来ていた方々をとつないで行いました。

このように、今日はい「ンターネットライブ授業」について話しました。青年海外協力隊として参加したカンボジアでの2年間で計画省の職場の仕事を始め、ほかにいろいろ「ボロシャツプロジェクト」というのもやりましたし、「スポーツプロジェクト」というのもやりました。それぞれに話すことは本当にたくさんあります。今日はインターネットライブ授業の話をさせていただきました。

これを体験した子供たちが将来いろんな夢を持ってくれたらうれしいなと思ってやっています。

とにかく、参加した子供たちが、今まで知らなかった選択肢をふやしてほしいなと思います。

たまに参加した子供たちに感想を書いてもらいます。お互いの感想を公開するんですけども、「日本語の勉強を始めようと思った」「コンピュータの仕事につきたいと思った」「ボランティアに興味を持った」、そういうふうなことを書いてくれて、実際どうなるかというのとはわからないですけども、思ってくれたというのはよかったと思います。

最初は、2年間の任期が終わるまでに1回か2回できるかなと。準備するのに1年半かかるという想像で始めたんです。結局は12回やれました。

これは何でかなと考えたときに、賛同する人がみんな喜ぶというか得する形を作っていたことが要因だと思います。日本の子供、カンボジアの子供、そして先生、手伝ってくれた専門家、協力隊員、そして僕も。みんなが参加したいから参加したという状況なんです。普通、カンボジアというのは、講習会や勉強会に行けばお金がもらえるという制度なんです。不思議な制度なんですけれども、そうなんです。そんな中、お金がもらえないのに賛同してくれる人がどれだけいるんだろうと考えたときに、カンボジア側のいい先生を探すのが難しいと思いました。ところが、やっぱり会って話をすると、いい先生がたくさんいると、それがわかりました。

やっついておもしろかったので、いろんな人が手伝ってくれるようになったというのが、すごいことなんです。

以前の私の思うボランティアというのは、なんだろうと考えたときに例えば募金であったり、寄付であったりっていう程度でした。

青年海外協力隊に参加した当初は、本当のボランティアって何やろうということを、よく考えていました。

最初、ボランティアの本当の意味って何だと。ものやお金をあげるのは難しい。これは本当に難しいです。ただ意味もわからずに、というか、とにかくカンボジアの人はかわいそうみたいな感覚を持っている日本人が多いです。ところが、全然違うんです。日本の普通の生活の中で、日本を基準にしたときにカンボジアを見たらそうなるんですけれ

ども、カンボジアを基準に見たら全然かわいそうじゃない。それをかわいそうという判断で、その判断のもとに選択されたものを送るということが非常によくないという話なんです。

なぜかという、たまにあるんですが、これはもうしょうがないことでもあるんですけども、例えば日本の学校には学年がかわったらノート新しいものにします。そしたら、余っているノートがむだになる。

多分、先生方が考えられたんでしょう。この使っていない部分をちぎって、あわせてテープで張ってノートをつくってカンボジアの子供たちに送ってあげたら喜ぶと思い、JICAにばーんと段ボール箱で送ってきたりするんですけども、実際にはカンボジアはノートめちやくちや安いです。

テープで張ったやつは、子供たちにも小さなプライドはありますから気の毒で渡せないです。

送る側では、先生がそう指導すると子供はそうなんやと思って、本当はその余ったノートに絵をかきたいんやけれども、カンボジアの子のためにと思って破ってつくったかもしれない。というふうに、子供たちの心のこもっているものが置き去りになったりしてしまうということがあるので、そういう形のボランティア活動って非常に難しいです。

結局、僕は2年間ボランティアをやってきて、やっと答えが出たことがあるんです。それは、それがすべてじゃないんですが、目標がどこにあるかが重要だと思うんです。

例えば、学校を建てるというボランティアやる人がおられますけど、日本のお金ですと数十万円で学校が建ちます。学校を建てるというのは近くに学校がないから通えないだから通える範囲に建てるんです。

最初はその学校に通い出す。でも1年、2年たったときにどうなるかといったら、先生がやめていく、子供もおらんようになってその後は廃校になるというような例もあるんです。すべてじゃないです。そういうのがあります。

それは何やろうというのは、学校を建てるのが目標ではなくて、子供がその学校で勉強できることが目標のはずなんです。ということは、学校で子供が勉強をするというところを見てやらないといけません。

そこには、いろんな原因があります。学校の先生の給料も少ないし、農村部には先生になる人材は少ないです。ですから、そうなってしまう。そういうところまでフォローできるボランティアでなかったら意味がないですね。子供がずっと通える学校を作るためには、すごい労力もかかります。

けれども、ただむだになることをやったら極端な話、しない方がましです。お金をあげたりしても、もらい癖というのがついてしまう。

どうしても、結局、国の差なんです。日本人は金持ちでカンボジア人は貧乏、それだけなんです。でも、カンボジアの中では普通に生活しているのに、日本人が余り調べないでお金を渡す。そのことによって、日本からお金をもらえるんだと思ってしまう。カンボジ

ア人が悪いわけじゃないんです。

だから、本当に何をするのかというのをきっちり見て、ちっちゃいことでいいんです。ちっちゃいことでいいから、大切なのは気持ちが伝わるボランティアをやることです。別にお金もかけなくていいですし、時間がかかるかもしれないけれども、時間をかけられないのだったら、ちゃんと動いてくれる人に託すとか、そういうことをした方がいいんじゃないか。

僕の出した答え、ボランティアって何やろうというのは、本当にお金とか、ものとか、無償の労働とかするときに、ちゃんと気持ちが伝わる、目標をしっかりと見てやること。気持ちが伝わるようにコーディネートして、動くことがボランティアだなと僕は思いました。

皆さんには別にボランティアでも何でもいいですけども、とにかく物事をやるときに、見て感じて、自分で考えて、そして体験するということで何かわかると思いますので、もし今日の僕の話がちょっとでも皆さんの役に立てば非常にうれしいです。

今日はどうもありがとうございました。(拍手)

【司会】 ありがとうございました。

本当に時間がないんですけども、学生の皆さん質問はありますか。

【質問】 さっきノート類はカンボジアには足りているから必要ないという話をされていたんですけど、逆にカンボジアで今必要な、不足しているものというのは何なんですか。

【北田氏】 説明不足なんですけれども、ノート類が必要ないわけじゃなくて、ノートは買えない人には必要ですけど、ただ、どこに渡すとそれが活用されるかを調べずに送ってもそれが反映されない。反映されないのがよくないと思います。

何がというのは、人によっても意識によっても違うので、そこを見て、感じて、考えるということが重要だと思います。

一概にカンボジアはこれが必要だというものというのは余りないです。例えば、災害でライフラインが切れたときというのは食料とか必要であったり、お金が必要であったり衣類が必要であるとか、わかるんですけども、災害があったわけでもない普通に生活しているところにもものを送るというのは、何が必要かはちゃんと調べたり、中に入ってわかったりしてやることが重要なということです。

よろしいですか。

【司会】 ほかにありますか。

【質問】 日本とカンボジアの習慣の違いとかがあると思うんですけど、一番驚いたことは何ですか。

【辻氏】 「こんにちは」と言うときに、「こんにちは」ということというのは最近日本は余りないんじゃないかなと思うんです。カンボジアにいと、出会ったに絶対手を合わせてあいさつをするんです。「チョムリアップ・スーオ」と頭を下げます。

片手荷物を持っていたら、片手だけでもこうやってやるんです。それは子供もやりますし、おばあちゃんもやりますし、おじいちゃんもみんなやるんですけど、じゃ、私たちが例えば朝来たときとか、別に友達じゃない子とは顔を見知っていても挨拶をするかといえはしませんよね。そのことに最初とても驚きを感じました。

【司会】 もっともっと聞きたいんですけど、25分から皆さんはゼミでいろいろと回らなきてやらないので、あと一つぐらい質問ありますか。

では私が最後に。辻香織さんは今後、この後どういう人生を送ろうとしているのか、そこを話してください。

【辻氏】 今日、皆さんと出会えたのもご縁ですし、私と皆さんは今日出会えたことによつて繋がっています。心に不安があるという時もそういうことを思い出し日々を乗りきつていけば、楽しいかなというふうに思っています。

私はこれからますますいろんな所に行って、いろんな人に出会って、自分のつながりをいっぱいいっぱいつくつていきたいと思っています。

皆さんもその可能性は同じだと思いますし、私はこの場所から応援しています。

【司会】 彼女は次の段階の JICA の方の試験を受けるそうです。どんどんどんどん変わっていくんだなと思います。

北田さんはこれからどんな、人生を送ろうとしていらっしゃるでしょうか。

【北田氏】 海外で仕事ができればいいなと思っていて、そういう気持ちで準備しています。

このインターネットライブ授業については、うまくいくかどうかわからないんですけど、僕がいなくてもできるというようにしたいです。そして、ほかの国へ、移していけたらいいなと考えています。僕はその活動も含めて国際協力をやって生きたいと思っています。

【司会】 では、終わります。

最後に皆さん、もう 1 回拍手をお二人にお願い致します。(拍手)